町内にはさまざまなコミュニティがあり、独自の活動をしています。そんな皆さんの活動やイベントをご紹介するコーナーがステイ・スマイル（笑顔のままで）です。

Stay Smile ステイ・スマイル

Stay Smile 高原のアーティストを訪ねて

東に八ヶ岳、西に入笠山を仰ぎ見る、さわやかな高原の町、富士見。この地に生まれ、または惹かれて制作する、素敵なアーティストたちを紹介します。

【今月のアーティスト】　吉田　直樹（よしだ なおき）さん　木工作家・富士見町在住

吉田直樹さんは、1954年、千葉県千葉市に生まれ、通信社出版局で編集の仕事に携わっていました。1984年、30歳の時に木工の世界へ転身。長野県上松技術専門校で木工を学び、翌年から作品を発表してきました。1995年、富士見町境にセルフビルドの工房と併設ギャラリーを新設し、以来この地で制作を続けています。作品のテーマは、クラシック音楽やモダンジャズ。音楽が持つ魅力を視覚的にデザインし、温もりのある木の作品に仕上げています。その種類は幅広く、インテリアや照明、さらにはスピーカーなどのオーディオと多岐にわたります。弦楽器や管楽器、音符が細やかに表現された作品は、木の質感と柔らかな灯りとが相まって、ゆったりとした寛ぎのムードを醸し出しています。それは、さながら、お気に入りの名盤を心地好く聴いている時のようです。吉田さんは、個展歴も豊富で、東京をはじめ、大阪、京都、神戸、福岡など各地の有名百貨店アートサロンや特選ギャラリー、美術画廊に作品を出品しています。

▲ムーンライト
セレナーデ

吉田さんは、富士見へ移住したきっかけを、八ヶ岳と南アルプス、そして、富士見に深い縁があった尾崎喜八の『富士見高原詩集』と言います。現在は、音楽に加え、八ヶ岳や北アルプスなど、山をテーマにした作品にも取り組んでいるそうです。休日には、好きな音楽と山歩きを楽しんでいるという、吉田さん。山や木々とふれあいながら、今日も音楽の調べを素敵な形にしていることでしょう。

[Information]
吉田さんの作品は、工房「アンダンテ」併設ギャラリーでご覧いただけます。訪問される際は、事前にご連絡ください。また、お問い合わせいただければ、個展の予定などもご案内します。
工房「アンダンテ」☎0266-64-2141／
所在地:〒399-0101 諏訪郡富士見町境10174

▲吉田さん、工房にて

▲音楽の絵本
ベートーベン
弦楽四重奏曲第15番

文：前島孝一（小海町高原美術館館長・清里フォトアートミュージアム職員）富士見町富士見在住
facebook　https://ja-jp.facebook.com/koichi.maeshima.1

Stay Smile 「舞台で輝け」という目標に向かって

富士見中学校　吹奏楽部

私たち富士見中学校吹奏楽部は、「舞台で輝け」という目標に向け、日々活動しています。吹奏楽部は運動部のように何回も試合があるというわけではありません。限られた舞台で、一人ひとりが練習してきた成果を全て発揮するため、このような目標を立て活動しています。

私たちが一番輝く場として目指しているのは、夏のコンクールです。このコンクールでは課題曲と自由曲を演奏します。一年の中で一番大きな大会である夏のコンクールで全員が一体となり、一つの曲を創り上げるため、現在大切にしていることは基礎練習です。先月引退された三年生の先輩方もとても大切にしてほしいとおっしゃっていました。どんな曲でも、基礎がしっかりしていなければリズムが取れなかったり、音を合わせることができなかったりし、難しい楽譜も読み込むことができず、曲が吹けるはずがありません。一人ひとりの基礎が向上すればコンクールでもよい結果につながると考え、現在基礎練習を頑張っています。

夏のコンクールだけではなく、輝く場として、アンサンブルコンテストや文化祭、地域のイベントへの参加などの舞台があります。どのような舞台でも、一人ひとりがきらきらと輝けるよう、これからの練習を頑張っていきたいです。そして私たちがみんなと一緒にいつでも練習できることを嬉しく思い、またたくさんの人に感謝をしながら演奏をしていきたいです。

（吹奏楽部部長　雨宮紗和）

Stay Smile 赤十字をつくった人　アンリー・デュナン

赤十字の創始者アンリー・デュナンは、1828年5月8日スイス・ジュネーブに生まれました。31歳の時（1859年6月）デュナンは、フランス・サルディニア連合軍とオーストリア軍の間で行われたイタリア統一戦争の激戦地ソルフェリーノの近くを通りかかりました。

そこで見たものは、4万人の死傷者が打ち捨てられているという悲惨なありさまでした。街が負傷兵であふれかえった惨状を見て、デュナンは「みんな同じ人間どうし」という合言葉をもとに、町の人々や旅人たちと協力して、放置されていた負傷者を教会に収容するなど懸命の救護を行いました。「傷ついた兵士はもはや兵士ではない、人間である。人間同士としてその尊い生命は救われなければならない」ジュネーブに戻ったデュナンは、自ら戦争犠牲者の悲惨な状況を語り伝えるとともに、1862年11月『ソルフェリーノの思い出』という本を出版しました。この中で、以下の必要性を訴えました。

(1) 戦場の負傷者と病人は敵味方の差別なく救護すること
(2) そのための救護団体を平時から各国に組織すること
(3) この目的のために国際的な条約を締結しておくこと

この訴えは、ヨーロッパ各国に大きな反響を呼び、1863年2月赤十字国際委員会の前身である5人委員会が発足、5人委員会の呼びかけに応じてヨーロッパ16ヵ国がジュネーブに集って最初の国際会議が開かれ、赤十字規約ができました。この規約により各国に戦時救護団体が組織され平時から相互に連絡を保つ基礎ができ、デュナンの提案の一つが実現しました。そして、翌1864年には、ヨーロッパ16ヵ国の外交会議で最初のジュネーブ条約（いわゆる赤十字条約）が調印され、ここに国際赤十字組織が正式に誕生したのです。後の1901年12月10日、アンリー・デュナンは第1回ノーベル平和賞を受賞し、デュナンの誕生日である5月8日は世界赤十字デーに制定され、「赤十字をつくった人」として語り伝えられています。

富士見町赤十字奉仕団では、このアンリーデュナンの紙芝居を作成し、11月16日（日）に開催された生活展で発表をしました。
地域で紙芝居の読み聞かせ等のご要望がありましたら事務局までお問い合わせください。
問 富士見町赤十字奉仕団事務局（住民福祉課社会福祉係）　☎62-9144

Stay Smile 子育てはたくさんの笑顔とたくさんの手で ～子どもの領分を守るために～

NPO法人ふじみ子育てネットワーク　☎62-5505

「あそぶ」ということ

育児本や子育て雑誌などで「子どもにはあそびは大事」「子どもはたくさんあそばせてあげましょう」「子どもはあそびで育つ」という記事を頻繁に見かけます。そうです。子どもの成長にとって「あそぶこと」は欠かせません。もちろん、大人になってもあそびは大事ですが、ご存知のように大人にとってのあそびと子どもにとってのあそびは大きな違いがあります。大人にとってのあそびは、生活の余白部分の制約されない自由時間の活動で、いわゆるレジャーなどの息抜きの部分を持ったものです。

これに対して、子どもにとってあそびは「生活のすべて」と言えます。人間としてのあらゆる知識や認識を蓄えていく作業です。例えば、おもちゃあそび、砂場あそびなど子どもがあそんでいる姿を思い浮かべてみると、そこでは子どもは、手や指先を使うことで感覚を養い体を思い通りに動かす経験を積んでいます。自分の行動によって変化するおもちゃや砂を見て、そのものの特徴を理解していきます。おもしろいな～、たのしいな～、どうしてこうなるんだろう～、どうしたらいいかな～、うまくいかないな～、こうしてみよう～、など心にたくさんの感情が生まれています。側にいる大人や子どもとの関わりも経験します。

気ままに見える行動の中で、新しい発見を繰り返しながら生活の全てを使って自分自身の身体機能を発展させ、運動能力を作り、社会へ参加していく準備をしています。創造的時間で感性や自立心を育てています。子どもはあそびを通して自分自身を作り出しているのです。生産的活動なのです。

さらに言うと、子どもは心を開放させることのできる自由な空間によって成長します。心の自由な空間とはだれからも管理されない自分だけの世界です。大人の指図から離れて遊ぶとき、子どもは自分が主役になって無限に遊びを作り出します。この自由な空間に遊ぶことが、人間としての喜びを創造させ、子どもを自立させます。

大人は子どもを管理したくなるものですが、子どもだけの世界を持つことは、自分のエネルギーをそこで自由にに発散させることができることと理解し、子どもが「自分で決めて自由にあそぶ」空間を生活の中で、社会の中で守っていきましょう。